

## FRBR雑感：FRBRにおける異なる資料種別の作品の関連

故 選 義 浩

### 1. 文学に関係するオペラなどの音楽作品

レファレンスサービスの現場で悩まされる質問のひとつに、かけ離れた資料種別の作品の関連についての質問がある。極端な例ではあるが、たとえば、『トリスタンとイゾルデ』という古典文学が劇中で読まれる場面があるオペラはどのようなものかといった質問である。「トリスタンとイゾルデ」というワーグナーの楽劇はあるが、『愛の妙薬』というオペラがこれに該当する。しかし、文学事典でこの『愛の妙薬』まで言及するものは少ないし、音楽関係の事典でも、「トリスタンとイゾルデ」を検索の手がかりとしてこのオペラに言及するものは少ないかと言え。

図書館がその情報システムでこれに応えるのは責務であると考えても不思議ではない。現在、『Functional Requirements for Bibliographic Records』(略称FRBR)<sup>1)</sup>という、書誌情報の世界の新しい構造分析のもと目録システムの改築が進んでいる。そこにこめられた新たな機能によって、どのようにしてこれに応えようとするのかを探ってみたい。

他のジャンル(資料種別)に改作されている文学作品の代表例は、16世紀末頃のウィリアム・シェークスピア(William Shakespeare)の戯曲(悲劇)『ロメ(ミ)オとジュリエット(Romeo and Juliet)』であろう。これをもとに作成されたとされるオペラが、シャルル・グノー作曲の『ロメオとジュリエット(Romé et Juliette)』である。その物語は

シェークスピアのものとはほぼ同じである。その他にもプロコフィエフのバレエ音楽や、チャイコフスキー作の幻想序曲などがあり、さらに近年には映画などが何度も制作されている。

文学に関係する音楽作品には他に『魔法使いの弟子』がある。これはゲーテの詩をもとにしてフランスの作曲家デュカスが作曲した管弦楽曲である。この場合は、詩を題材にして音楽で表現したものである<sup>2)</sup>。この作品は、詩の内容やストーリーを重んじた標題音楽であるという説や、そうではない絶対音楽だという考えもある。

さらにもう一つの作品をあげてみる。『ジャンニ・スキッキ(Gianni Schicchi)』という、プッチーニ作曲のオペラである。1918年に初演とされている。主人公のジャンニ・スキッキの娘ラウレッタのアリア「O mio babbino caro」で有名なオペラであるが、このオペラの登場人物の名前でもある題名は、ダンテ・アリギエーリの『神曲』の地獄編第30歌に基づくとされる。その該当箇所はつぎのとおりである。

『そこに残ったアレツォ人[グリッフォリーノ]は、震えながら私に言った。「あの魔物はジャンニ・スキッキだ。(狂犬のように)怒り狂って、あのよう他人を苛みまわる。』」<sup>3)</sup>

「ジャンニ・スキッキ」が出てくるのはこの部分だけであり、引用部分の後では「彼」

などといった人称代名詞で少し出現するのみである。オペラの台本作家フォルツァーノもしくは作曲のプッチーニは、その本文ではなく解説文から、遺言状の書き換えというヒントを得て筋書きを書いたとされる説もある。『神曲』とオペラのつながりは、ジャンニ・スキッキという人物名とこの遺言状にまつわるテーマだけにあるように思える<sup>4)</sup>。

## 2. FRBRの第1グループの構造

さて、このように、ジャンルの異なる作品の関連情報を図書館利用者に提供する機能を、FRBRが実現する新たな構造の中に見出そうとするのが本稿の任務である。

書誌記述の世界を構造化しようとする試みがIFLAのもとで1992年に行われたとき、そのための手法として、ハイレベル・エンティティ分析を行ったとある。これはチェン (Peter Chen) の提唱したE-R modelをベースとして採用している。このモデルは「実世界の意味上の関係を中心に表現するもの」であり、「世の中に存在するあらゆるものは、具象的であれ抽象的であれ実体 (ENTITY) と関連 (RELATIONSHIP) という2つの概念で表現することが可能である<sup>5)</sup>」という<sup>6)</sup>。

E-R modelの世界では、「実体」とはその実世界に出現する類似の個々の概念の集合体をさす。「実体」はエンティティの訳語ではあるが、エンティティはエンティティ・タイプとエンティティ・アイソレート (オカレンスともいう) とにわかれる。ここでいう実体はエンティティ・タイプである。言い換えればエンティティ・アイソレートの集合体であり、エンティティ・アイソレートはエンティティ・タイプに属する個々の概念になる。

FRBRの書誌記述の世界では、書誌記述の

対象を階層的に捉えて、個別資料item、体現形manifestation、表現形expression、著作workとの4つの「実体」をエンティティ・タイプとして認める。その4つの「実体」を第1グループとしてまとめ、製作者として第2グループ、主題を表す第3グループをまとめている。

## 3. 著作と表現形

一般的な従来の考えでは、著作という概念は、例えば文学作品のとき「文字」を得てすでに表現されたものをとらえてきた。しかし、FRBRでは、一般的に考えてきた著作を「著作 (work)」と「表現形 (expression)」に分ける。「表現形」で初めて文字を得るのであり、「著作」では文字などで表現する以前の抽象的なアイデアを想定している。

FRBRの3.2.1 Workによると、一番目の実体である「著作」は、「個別の知的・芸術的創造 (creation) である」としている。すなわち、個々別々の創作であり、類似のものを集約し、かつ他との明確な異なりを持つものという解釈でよいであろう<sup>7)</sup>。

「異なるテキスト (variant texts)」を、同一「著作」のもとにまとめると同時に、それぞれは異なる「表現形」とする。これらには、縮約版や増補版、他の言語への翻訳、編曲などが相当する。このような定義づけからすると、冒頭で述べた音楽作品とそのもととなった文学作品を、「表現形」と「著作」として関係付けることは考えられない。

またFRBRでは、べつな「著作」とするものを、「著作の修正が独立した知的・芸術的活動に大きく関与している場合」とし、意識、児童向け翻案、主題による変奏曲および楽曲のフリー・トランスクリプションを別な「著

作」の例としている。また「ある文学形式・芸術形式から他の形式への改作」、抄録、ダイジェストおよび要約もまた新しい「著作」を表現しているとみなす。したがって、音楽作品と文学作品が関連を持っていたとしても、この「他の形式への改作」とみなし、それぞれ別々の「著作」としなければならない<sup>8)</sup>。

#### 4. 関連

E-R modelにおいては「実体」のほかに、「実体」と「実体」との関係を示すものとして「関連 (Relationship)」が考えられている。各「実体」間の「関連」のインスタンスのあり方には制約があるとされる。基数制約と存在依存制約と呼ばれる二つである<sup>9)</sup>。そのうちの基数制約は、実体タイプがそれぞれ相互に関連するときの個数についての制限である。

#### 5. 著作と表現形の関連

三つの基本的な関連の中のひとつである「著作」と「表現形」の関連は、「を通して実現される」関連であり、FRBRのERダイアグラムでは、この関連の基数制約は1 : Nとなっている。したがって、この基数制約からは、オペラなどの音楽作品を「表現形」としてとらえ、オペラの「著作」と文学作品の「著作」の両者を、単一の「表現形」が関連付けることはできない。

#### 6. 著作と著作の関連

冒頭命題のオペラなどの音楽作品とそのもととなった文学作品は、それぞれの「著作」の関連の中でこの関係を表す事ができるのだろうか。FRBRの「著作」と「著作」の「関連」のタイプには「後継 (successor)」「追補 (complement)」「要約 (summarization)」

「改作 (adaptation)」「変形 (transformation)」「模造 (imitation)」がある<sup>10)</sup>。さらに、例示として、W. A. Mozartのオペラ『ドン・ジョヴァンニ (Don Giovanni)』とJoseph Loseyの映画『Don Giovanni』は、ともに「著作」として成立していて、「改作」の「関連」を持つものとしてある。

このオペラと映画の作品には、それぞれ別な「著作」を考えなければならないとしている<sup>11)</sup>。同じ“Don Giovanni”であるが、別な「著作」と考えている<sup>12)</sup>。

#### 7. 結語

冒頭で述べた事例について考えてみよう。1番目の『ロメオとジュリエット』は、FRBRでも例示しているように、ともに別々の「著作」をつくり、これを翻案であるとして「改作」という関連で関係付けることはできる。

つぎの『魔法使いの弟子』は、ゲーテの詩が表す情感をデュカスが曲にしたものであり、物語の継承については疑問点があり、同一性は希薄であるとしても良いのかもしれない。「著作」間の関連として、このような“楽曲化”を表すものに、「改作」や「変形」が考えられるが、適切とは言いがたい。新たにこれに対応した「関連」タイプを追加しないかぎり、ここで表すのは困難であるように思える。

最後にあげた『ジャンニ・スキッキ』については、人名とテーマだけであり、いままで見てきた「著作」と「著作」の関連で表現するにはあまりに希薄である。FRBRは書誌記述の世界での構造化を考えているので、当然の適用除外という判断であろう。

『トリスタンとイゾルデ』と『愛の妙薬』

の関係も同様に考えてよいであろう。

## 8. 評価

現場では、すなわち図書館のカウンターでは、このような些細な知識を求められることがあった場合、いままでは、そしていままでも、これらの利用者の要求に対しては、レファレンスサービスとして、関連する二次資料を探して応えたり、個人的にそのような知識をそなえた図書館員（主題専門家）が応えたりしてきている。

上記の『ロメオ…』は、新しいFRBRの書誌記述の世界で応える体制が出来上がる。すなわち、利用者がコンピュータ目録というデータベースを調べる中で、「著作」の「関連」でつながれた書誌事項が表示されることで、利用者が直接自己の情報要求を満たすことができる。

しかし、『ジャンニ・スキッキ』などについてはどうすべきか。目録の機能を広げる事も考えられるが、あまりに多機能さを追求してしまい、複雑なシステムとなった例はたくさん見受けられる。1960年頃に、最初に目録システムを構築したときのチームの合言葉は「シンプル イズ ザ ベスト」であった。またこのことは、そのまえに経験した大学図書館の受入システムから学んだことでもある。

そのような意味から、『ジャンニ…』などについては、目録システムから離れ、別なシステムで実現すべきと考えても良いであろう。

また、「著作」どうしの「関連」で図書館が応えとしたとき、一つ一つの著作物について、どのような著作物がこれに関連するのかを調べ、それを共有するためにデータベース化するという膨大な作業が必要となる。

一つ一つを人力で対応する事は考えられな

い。これに対処するために何らかのシステムを構築する必要がある。たとえば、図書館で必要とする情報のビッグデータをベースに人工知能を構築し、人工知能としてのレファレンスデータベースを構築するという、図書館に特化した人工知能が考えられる。そして、図書館のカウンターからネットワークを通してこの人工知能システムを随時利用できる。そのような図書館システムを構築することも一案であろう。

## 9. まとめ

文学に関連したオペラを例に挙げながら、FRBRの構造を「著作」と「表現形」を中心に見てきた。しかし、それに伴う課題も垣間見えてきた。

FRBRによってさまざまな課題が解決されてきている。目録の世界、書誌情報の世界も大きく発展することは定かである。そして、この延長線上にみえてきているさまざまな新しい機能について、それらを確実なものとするために、今後、FRBRあるいは新しい目録システムの外延を定かにし、図書館が進めていく情報提供システムのなかでの目録システムの位置づけと、その外側の図書館システムを明らかにしていく必要があるように思える。

なお、本稿では論述すべき論証過程を、さまざまな意味で省略しているが、かなり理解しておられる諸兄を対象として論述したということでご了解願いたい。しかし、いずれは詳細な論証をしなければならないとは認識している。したがって、その論証は時を得て、他稿において行いたいと思っている。

注

- 1) 『書誌レコードの機能要件：IFLA書誌レコード機能要件研究グループ最終報告：IFLA目録部会常任委員会承認』和中幹雄・古川肇・永田治樹訳 日本図書館協会, 2004
- 2) 『クラシック音楽作品名辞典』改訂版 三省堂 1999
- 3) ダンテ『神曲』地獄篇対訳(下) 藤谷道夫 帝京大学外国語外国文学論集 第17号 p. 205 より引用。
- 4) 『オックスフォード オペラ大事典』ジョン・ウォラック, ユアン・ウェスト編著 平凡社 1996 と『新グローヴ オペラ事典』スタンリー・セイディ編 白水社, 2011を参考にした。
- 5) 『改訂 ERモデルによるデータベース設計技法』林衛著 ソフト・リサーチ・センター, 2005
- 6) この実体と関連に加えて属性をあげることもある。属性attributeは実体の特性として、実体を持つデータ項目を意味する。
- 7) FRBRでは「著作」は抽象的な実体であり、著作として物理的対象物は存在しない。著作は「個々の実現すなわち著作の表現形を通して」のみ認識できるし、「著作自体はさまざまな表現形の間での内容の共通性としてのみ存在する」としている。  
そして、抽象的であるために「正確な境界線を定義することは困難」であり、「著作」の概念規定については文化に従って定めることとなるとした。しかし、FRBRを定めたIFLAの性格から、世界的な共通認識は、漠然としてでも、存在するのであろう。
- 8) 一般的な著作に近いと思われる「表現形 expression」については、FRBRで「英数字による表記、記譜、振付け、音響、画像、物、運動等の形式あるいはこれらの形式の組み合わせによる著作の知的・芸術的実現である (realization of a work)」としている。creationであるworkをrealizeしたものということである。それゆえ、この「表現形」は、英数字による表記などで理解 (understand) できるようにしたものということになる。「著作」は他の人には理解しがたいものであり、著作者の脳裏の中にとどまっている創作であるが、これを他の人に理解できるように、言葉を与え、音階を与え、図形や動きを与えた状態であらう。同時にそれらはいまだ固定化されておらず、具体化されていない状態であるといえるのは、つぎの「体現形」との関

係において言える。

- 「表現形」とされるもののアイソレートの個々の状態をみていくと、FRBRでは「表現形は、著作が『実現される』ごとに生じる特定の知的・芸術的形式である」としている。すなわち、「著作work」をさまざまな形式で実現 (realize) した個々のものである。これには同一著作の原本とその翻訳書もそれぞれ同一著作の表現形として含まれる。
- 9) 『情報管理の技法：ERモデルによるデータベース設計』酒井博敬著 オーム社, 1987
  - 10) FRBRは5.3.1でこの関係を説明しているが、その種類を表5.1にまとめている。これは、著作と著作の関連の種類を示している。
  - 11) それらは、オペラの台本や楽譜として表される以前の、そしてオペラ歌手が演じる以前の抽象的創作と、映画の台本や俳優が演ずる前の創作とである。
  - 12) その理由として「1 著作の知的・芸術的内容が、単独の著作を構成するのに十分なほど他と異なると判断されていること」をあげている。